

口承文藝研究の現在

大島 建彦

一九七〇年代の初頭から、日本の経済の高度成長にともない、僻地の村落の過疎化とあいまって、都市の周辺の過密化も進んでおり、ひろく民俗の全面にわたって、きわめて急激な変貌があらわれてきた。昔話などの口承文藝というのは、ほかの分野の民俗とくらべると、多分に個人の才能にさええられていたとしても、やはり共同体の崩壊とともに、その本来の生命力を失ってしまったといってもよい。今日の民俗学にとつて、もつとも大事な課題は、そのような現実への対処を通じて、どれだけ有効な調査を進めるかということにつきるであろう。

改めてかえりみると、日本の民俗学という学問は、その出発の当初から、何よりも社会の近代化にともなう、いわゆる伝承文化の衰滅とかかわる、きわめて深刻な危機感につらぬかれていたといえよう。これまでの民俗の調査でも、眼前の村落の状況からさかのぼって、前代の生活の実情をさぐるうと、古老の伝承の聞き書きをとりつづけてきた。実際に、民俗学の先輩の方々も、やはりフィールドワークの現場では、「ああおそかった、もうすこしはやければ、もつといろいろなことが聞けたのに」というような、もどかしい思いから離れることができなかったという。そういうわけで、今日の民俗の様相に対しても、幅

ひろく現地の記録をいかしながら、ねばり強く古老の記憶をたどっていつて、すくなくともその変化の現実だけはおさえておきたいものである。

日本の民俗それ自体は、もはや衰滅の危機にのぞんでいても、これまでの調査の成果は、すでに膨大な分量にのぼっている。そこで、もう一つの重要な課題としては、それらの貴重な資料について、どのように有効な活用をはかるかということを考えなければならぬ。しかも、そのような資料の蓄積も、あらたな調査の裏づけによつて、いつそう有効に活用されるということとを忘れてはならない。いずれにしても、一国民俗学から比較民俗学へという方向にそつて、いつそう精緻な分析を進めてゆくには、やはり一つ一つの資料の吟味が求められるのであつて、全体として多大な労力を要することはいうまでもない。

(おおしま・たてひこ／東洋大学名誉教授)